

限らないから「八」さうでムいますね」「八」銀猫と回向院前さへ通らなければ何も起りは致ませぬ「言ふ所へおとさか」「貴郎、そんな所へは入つしやらないで下さい、近江屋さんなら永代の方から行つて下さい」「八」ア、さうしませう」「小僧の長吉を連れて入らつしやい」「八」さうしませう」「召物は「八」何でも可いから出して下さい」「藍微塵の方を召して入らつしやいますか、鼠地の方になさいますか」「八」それでは藍の方にしませう」「貞淑なおとさか何かどの心盡し、之れから藍微塵の着物に博多の帯、羽織を着て八郎兵衛、店へ出て来ると、番頭の由兵衛と云ふのが居りました由「それでは旦那様、御早く」「八」直ぐ行つて来ます」もう以前とは違ひ今日では立派な八郎兵衛、懐中の紙入には澤山に金も這入つて居る、別に胴巻にも金は這入つて居る、痒い所へ手の届くと云ふ女房おとさかの親切に八郎兵衛は只もう喜んで居る

やうなと、今小僧の長吉を供に連れて家を出掛けた、女房や母親にも言はれたともあるから兩國へは掛るまいと思つたけれども、家を出ると急に心が變り、米澤町へ来て三次の所へ立寄つた、今日は三次も家に居つて「三」まア八さん能く来なすつた、さア御上りなさい」と言つて酒肴を出して種々と待遇して呉たので、つい八郎兵衛、此所に時を移した、此時に三次は「八さんお前さんも今は大した身の上になつた、之も皆御主人様の御蔭だ、決して其御恩を忘れてはなりませんよ、もう一、もう大丈夫だらうと思ふが念の爲に言つて置く」と懇々注意したのは、之も何かの前兆であつたとは後にぞ思ひ知られました、そこで八郎兵衛は三次の厚意を謝して之れから兩國へと掛つて来ると、向ふに大層な人が立つて居る、何だらう

と思つて八郎兵衛ズカズカと其處へやつて来て見るとそれは易者だ、大きな笠を被つて頻りに何か言つて居ります、其辯舌が又爽やかで、言ふことも面白いから一バに人が群て居る。〇「さア〜皆の衆や、人間の手の筋に其壽命が現はれて居るものぢや、もう一生の運勢は手の筋で分る、さア望みの者は左の手を出しなさい、見て進せる、今日の身體が丈夫で金も澤山ある何不足のない人も、明日はどうなるか分らぬものだ、之れから先きのことを聞いて心を定めるのが本當の人間と云ふもの、さア〜早く左の手を出しなさい、本當の運勢を見て上げる」と頻りにやつて居る、イヤどうも夫に就いて色々のことを言つて居るが實に其言ふことが面白い、八郎兵衛之を見るとズカ〜と夫れへ出て「ハ〜どうか手の筋を見て下さい」と左の手を出した易者は「コレハ〜立流な御方、能く見て進せやう、オウ成程之れは好

い手の筋ぢや、好い筋ぢやが、困つたことには筋がすつと通つて居ないな、之れがすつと通つて居れば天下を取る相だ、さもなくば大金持になれるのぢやが、ウム、之は驚いた、此筋は途中で切れて居る、やア之は大變だ、事によると劍難の憂がある、氣を付けさつしやい「ハ〜何、劍難がムいますか……………」〇「どうもあるな……………」
 ……「ハ〜ヘイ……………」〇「併し之は日々變はるものだから、さう心に掛けぬでも可いがまア氣を付けるに越したことはない」
 「ハ〜ヘイ……………」小僧の長吉は「若旦那そんな易者杯の言ふことを當てにする者ではムいませぬ、さア行きませしやう〜」
 「ハ〜ウム、イヤ大きに御喧ましようムいしました」と見料を拂つて八郎兵衛「アア〜何と言つて宜いか譯が分らぬ、劍難とはどんなものか、不思議などである……………」と獨言を言いながら兩國橋の半ばへと、掛つて來た、折しも後方から香具屋彌兵衛が

「ア八さん」と聲を掛けた。八「オヤ香具屋さん」彌「オヤ香具屋さんではないせ、どうも大層もない立派になつたな、どうも豪いな」八「何を仰しやる彌兵衛さん……」彌「フ、ーン、面白くもない熊谷の陣屋で悪七兵衛彌兵衛と義経に呼留めれてるに彌兵衛さんと云ふ方と、歌舞伎芝居の狂言ではないが、彌兵衛さんなどは何だ、之でも中橋で香具屋では大したものだ、まア夫れは措いて、おつまはもう此頃は俺の物にして仕舞つた、安心するが可い、お前は今は富田屋八郎兵衛となつて女房も出来たし、此頃は目の上の瘤の番頭の忠藏が居ないから、家とは何でもお前の自由自在、斯やつて外へ出るにも小僧を連れて旦那風以前の八郎兵衛の様子は何處へやら、僅か一年経たぬ内に、すつかり變はつたものだな、本當に見上げたものだな、併し八さん、古着屋丈に何處か面が古臭く出来て居る、ハツ／＼ハツ、そ

れにしてもおつまは可哀想なものだ、怨んで居るせ」八「それは怨まうと怨むまいと貴下の御世話にはなりませんね」彌「さうか、併しお前の内儀さんも美しい女だ、あんな女を有つて結構だ、さりながら此の彌兵衛もな、あのおつまを近日身受して富田屋の近所へ家を持たせる心算だ」八「さうでムいますか、それは結構でムいます」彌「餘りお前に取つては結構でもあるまい、ハツ／＼ハツ、併しおつまも到頭俺に惚込んで仕舞つた、此間おつまの母親が亡くなつたが、俺が葬式も何も皆してやつたよ」八「さうでムいますか」八郎兵衛は面倒と思つたから「やア又御目に掛ります、左様なら……」無愛想に挨拶をして行き過ぎやうとすると、後方から番頭の忠藏が「之は若旦那ですか……」と皮肉な掛け聲、八郎兵衛恂つとした。忠「ちやアない八郎兵衛」八「ウーウ、忠藏か」ち「何だ忠藏かなんて、生意氣なことを言ふな、彌

兵衛さん、此奴の面は本當に氣になりますね、何だか死神でも取つ付いて居るやうですな、ハツ／＼ハツ、さア銀猫へ行きませう／＼」と二人は連立つて向ふへ行つた八郎兵衛憤と癢に障つたが、今易者に戒しめられたことを思ひ出し、ア、／＼あんな者を相手にしたとて仕方がない、おつまが彌兵衛に全く心を傾けるやうになつたと云ふのも當てにはならない、一つ行つて見たいやうな氣もするが、今日は日が悪い、それに俺の今の身の上を考へれば、あんな所へ近付いては濟まぬ、近江屋さんへ行くのは又次ぎの事として、今日は此儘何處へも行かないで歸つて仕舞うが宜いと心付きましたから其儘家へ歸らうとした、此時にすつと歸つて仕舞へば宜かつたのだが、さう行かなかつたのが詰り事の起る所で恰度此時に銀猫のさかひやのお千代が女中を一人連れて其所を通り掛つた、之は觀音様へ參詣に行つた歸り掛け、途

中で一杯やつたと見えて上機嫌　「やア誰かと思つたら八さんではありませぬか」
 八「オウお千代さん……」　「まア暫くでムいましたね、何ぼ身が固まつて古着屋の若旦那になつたと言つて、偶には顔を御見せなさいませよ、お前さんの持て來た百兩は私の所で失くしたと云ふが丸でなくした譯ではない、五十兩は香具屋さんに返して跡の五十兩はまだ預つて居る、家へ御出なさいよ、内の重兵衛さんだつてお前さんを他人行儀にはしないやね、おつまだつてお前さんのとは忘れて居やしない
 八「彌兵衛がおつまを身受けして……」　「そんな事はありやしない、嘘ですよ」
 八「ウーム、さうだらう」　「兎に角家へ一遍御出なさいよ」再三言はれて八郎兵衛ヒヨイと心が動いた、之が一生の誤りとは知る由もない　八「ウーム、さうかオイ長吉」長「へイ」八「お前夕暮方にあの銀猫まで來て御災れ」長「へイ、それは宜しうムい

ますが……。「八」それ迄は何迄かで遊んで居てな「長」へい……。「八」兎に角お千代さん、一緒に行つて夕方まで飲みませう「ち」どうかさうして下さい、鳥渡小僧さん、この御金を」と幾らか小僧にやつたから、小僧はそれを貰つて見世物へ飛込んだ、此方は八郎兵衛はお千代と一緒にさかひやへ来る、直に二階の座敷へ来ると酒肴が出る、二三人の女が夫れへ来て八さんくと言つて取持をする、お千代もそれへ来て「ち」本當に入さん、少つと来て下さいよ「八」それは来る心算では居るが、私には金の融通が少しも付ないし「ち」だつて若旦那になつて……。「八」若旦那にはなつたが金のことは自由にはならない、月々の小遣も決められてあるし何處へ行くにもやかましくして、一寸も自分の身が自分で自由にならない、けれども夫れは夫れとして此所に御金が之れだけある、之をお前さんに差上りますから「ち」十兩なんて、そんな

なに澤山……。「八」イヤ久振りのとだ、之れで家中の者を皆呼んで下さい「大」どうも濟ませぬね「八」あのおつまはどうしました「ち」今に來ませう」と言つて居る所へおつまに於ては八郎兵衛が來たと聞いて「よくまあ八さんが……。」と夫へ這入つて來た「ち」八さん……。「八」オウおつま久振りだつた「ち」久振りではない、人の心も知らないで去年香具屋彌兵衛から怖い思ひをして五十兩の金を取つて貴郎の方へ上げたら、夫れ切り黽の道、本當に酷いぢやありませんか……。」と涙ながらに怨み言

八郎兵衛はおつまの怨みを聞いて「イヤ五十兩お前が拵へて呉れた親切は今以て忘れはしない、併しあれ切り私に來なくなつたのは詰りお前の手紙を見たからのことさ」「ち」何ですと……。「八」もう妾は彌兵衛さんの世話になるから八さんお前に用は

ない、もう来て呉れるなど云ふ手紙を寄越したらう。」つ「それは上げたさ、上げたつてあれは妾の眞實の心からではない、と云ふのはお前の御主人富田屋作太郎と云ふ人が此所へ来て妾を呼んだのだよ」八「何、あの御主人がお前を……」つ「さうさ、呼んで八郎兵衛と云ふ者は忠義な者だが番頭の忠藏が悪いので今迄は本當に困つた今度其忠藏は逐出すことになつたのだが、それに就いて八郎兵衛の身を固めが肝腎、おつま、お前には氣の毒だけれども、どうぞ八郎兵衛と縁を切つて貰ひたいと、十兩の御金を前へ出して兩手を突いて頼まれた、妾も其時には本當に涙が出た、ア、濟まないことだ、之れ程迄に自分の家の者を思つて下さる御主人様はア、有難いものだ、それに引換へ此家のお内儀さん位不實な人はありやしない、妾が彌兵衛から騙して金を取つて上げたにも拘らず、其金を彌兵衛に返したなんて、其金もお前さ

んから預かつたやうな金だ、それとは違つてお前の御主人の親切、妾は眞に感心をして直に手紙を書いて上げたのだが、併しお前だつて之れは何か仔細がある位なことは、氣が付かぬことはあるまい、一寸顔でも見せて呉れるが可い、本當に情なしだよ」始めて聞いた縁切り狀の魂膽、八郎兵衛は「ウーム、さうであつたか、それは濟まなかつた、おつま、どうも濟まなかつた、御主人が来てお前にさう云ふ事を頼んだとは私は些とも知らなかつた……」つ「些つとも知らなかつたものな、そんな不實な男にはもう用はないのだ、今では彌兵衛さんばかりではない、彌兵衛さんが此頃連れて来た新さんと云ふ御方、それは妾はすつかり惚れて仕舞つたのだよ、今に新さんの女房になる氣だよ」八「ウーム、それやおつま、心からプツリ私をば思切つたと云ふのだな」つ「當り前さ」八「さうか、それなら夫れで可い、思切

つたなら思切つたで可い、もう之迄だ……」八郎兵衛も好い心持はしない、所へ
 香具屋彌兵衛と前の番頭の忠藏が這入て来た。彌「オイ、八郎兵衛」八「やア之は彌
 兵衛さん……」彌「おつまはの、すつかりと俺のものになつて仕舞つた、もう汝の
 やうな者がグズグズ言ふ所はない、それに俺の所に新公と云ふのがある、それにお
 つまは惚れやがつた」忠「やい八郎兵衛」八「やア汝は忠藏……」忠「何を言つてや
 がる、汝のやうなものに何も用はねエが、世界中の馬鹿を一人で脊負つて居る大馬
 鹿三太郎だ」八「何だ忠藏、貴様はよくも今迄俺のことを兎や角言ひやがつたな、
 此八郎兵衛をよくも御上へ突出さうとしやがつたな、怨みは重なつて居るのだが今
 は俺も富田屋の養子の八郎兵衛、何にも言はない、何れ其内お主に遇つて怨みを報
 う機があつたらば怨んでやらう、今日は場所も場所だし我慢をしてやる」忠「ハッ

ハッ、大きく出やがつたな、御氣の毒だが汝などに怨まれて堪るものか、馬
 鹿奴「八」まア何とでも言へ、オイおつま、盃をやらう」つ「八さん、折角だが不實な
 男の御盃は貰ひたくない、却つて此方から斯うして上げるよ、さア御受取りなさい
 よ」言ひつゝ、ポーンと投げた盃、八郎兵衛の眉間へ當つたから堪らない、道がの八
 郎兵衛も憤としておつまを睨め付ける、彌兵衛や忠藏は手を打つて笑つて居る、さ
 ア事が少し面倒になつて来たやう、八「やいおつま、汝は此八郎兵衛の眉間へ猪口を
 投げたな、イヤさ投打ちをしたな」つ「したが何うしたのだい、酔つばらつて泥棒さ
 へも脅かして歸した位のおつまだよ、投打をしたのが何うしたんだい、一生懸命に
 盡してやつても夫れ程に思はない不實男、根が大醫生生まれだからさうだらうが除ま
 り人を馬鹿にして居る、江戸の水道の水で育つた女などの心は分かりやしまい、ま

ア〜お前は古着屋相應の男だ」イヤもう散々の悪口、八郎兵衛も今は愈々黙つて居られない。ハ「やいおつま、古着屋相應とは何だ、言はして置けば口の横に切れたる儘出放題な其悪口、もう勘辨ならぬエ……」つ「だつて古着屋商賣に違ひなからう、勘辨ならぬなんて生意氣なことを御言ひでない、エ、顔を見るのも忌やだ、早く歸りやがれッ」ハ「何だと……」八郎兵衛思はず拳を握つて立上つた、彌兵衛と忠藏は之れを見ると、彌「やい八郎兵衛、何うしやうと云ふのだ、おつまの身體へ手でも觸つて見ろ、只は置かねエから」ハ「何を言ひやがるさア斯うなれば貴様達も敵手だ……」八郎兵衛烈火の如くなつて三人を相手に大立廻りでも始め様とした折しも向ふの座敷で武士の聲として、士「コレ〜女中」女「ハイ」士「何を騒いで居るのだ、町人が何か間違ひでもあるならば拙者の所へ申して參れ、何とでも致して

やるから」女「イエ御心配はムいませぬ大した事ではムいませぬ」士「さうかそれならもう少し静かにしろと申せ」女「ハイ」此武士の言葉を聞いて八郎兵衛少し驚いた、武士が向ふに居ては手は出せない、ア、仕方がない、長居は無用と其日は何にも言はず胸を撫つて立歸りました跡には一同手を打つて大笑ひ、中にも彌兵衛と忠藏は「ア、好氣味だつた之れで少しは溜飲も下つた」と其日は大散財をやつたと云ふ、此方は八郎兵衛家へは歸つて来たが、さて考へれば考へる程口惜しくつて堪らない、迎も此儘にして置くことは出来ぬ、己れどうしてやらうかと思つたが、之は行つて一つ金びらを切るより外に手段はあるまい、それが一番だと夫れから算段をみると幸ひ百兩ばかりの金の融通が付いた、宜し一つ、之を持つて金びらを切つて彼等を驚かしてやらうと、止せば宜いのに八郎兵衛、小僧も連れず只一人、懐中へ金を入

れて銀猫の家へこやつて来た、銀猫ではもう八郎兵衛は来る氣遣はあるまい、おつまの心もすつかり變つて居るのだからと思つて居る所だから少し驚いた。○「オヤ八さん入らつしやい、まアどうしたの」八「どうもせぬ、おつまに遇ひに来たのだ、おつまは何處に居る」○「おつまさんは今御客の所へ出て居ますよ」八「何處の客だ」○「何處の御客でも可いちやありませんか」八「イヤ宜くはない、其客次第で今日は俺に考がある、どうか其客を見せて呉れ」○「それは困りますね、今日の御客は只の御客ではないのですから」八「さう言はれ、ば尙ほ見たい、是非見せて呉れ」○「さうですか、ちやア行つて御覽なさい、二階の奥の座敷ですから」八「さうか」之れから八郎兵衛、其座敷の此方へ来て、客と云ふのは誰だらうと物と覗いて見ると驚いた、驚いたのも尤も、一人の立派な武士がおつまを相手に盃を上げて、キコレつま久

潤であつたのう、先日お前を側に呼んで話しをしたいと思つたが、餘り客が多かつたので到頭側へ呼ぶことも出来ず空しく立歸つたが、今日は寛く語り話も出来、此様な喜ばしいことはない、ア、くお前と別れて何年になるかの「水野さん、紋彌さん、貴郎も大變に御年を取りましたが、妾もあれから見ると本當に年を取りました」水「さうぢやの、別れて恰度七年になるかの」貴郎に御別れ申してからもう七年、短いやうで長いのは月日でムいますね、貴郎も立派な御方に……」紋「イヤ別に立派な者にもならぬ拙者は其方のとをば一日たりとも忘れたことはない今一度遇つて何とか致してやりたいと思つて、居つたなれど夫れも思ふ丈けで心に任せず今日迄打過ぎた、嗚其方は怨んで居つたのであらう幸ひ此度江戸詰となり久々にて出府致し、早速其方の家を探ねし所、今は他人が住んで居る、段々様子を聞くと、其

方は親の爲に此家に身を賣りしとやら、やれ不憫な者よと直に之れへ參つたが此間は折悪しく客が多くて其方と話も出来ざりしが、今日は寛々話すことが出来て此様な満足はない、つま、もう此の紋彌が參つたからには其方を此様な所に長く置きはせぬぞ、其内に身受けを致して身の方向を決めて遣はすから、左様思つて居るやうに」と言ふのは水野紋彌が久々でおつまを尋ねて來たものと見える、おつまは紋彌の一言を聞いて「有難うございます實は妾も貴郎さまのことばかり思つて居て一日とても忘るれことはなかつたのですが、貴郎に似て居る八郎兵衛と云ふ人にまア大變に凝ましてね、一時は随分大騒ぎもしたのですが、其八郎兵衛と云ふ人が顔は貴郎に似て居ても心は全然雪と墨、妾はもう忌やになつて仕舞つた所へ眞實の紋彌さん、貴郎が尋ねて來て下さつたので、本當に夢のやうな心地が致しましたよ、貴郎

に遇うと昔が懐かしくなりましたね」紋「さうであらう、其方も拙者も戀路の爲に踏み迷ひ種々なともあつたが、今になつて以前のことを思ふと夢のやうぢや」「本當にね、紋彌さん」紋「つま」「昔は夢ですわね」頻りに話しをして居る、それを八郎兵衛が聞いて「ハ、ハ、ア、して見ると此武士はおまつの昔馴染か、斯う云ふ人が來たからには俺に愛想を盡かしたのも尤もだ、香具屋彌兵衛がおつまを自分の物にしたなんて、それは皆嘘だ、元木にまさる末木なしとは此事か、さうとは知らず大金を持つておつまの心を動かし先日のことを責めてやらうと思つて來たのは、全く此方の心が足りなかつたのだ、もうおつまの心はすつかり分つた、之れで俺も諦めが付くと云ふもの、それにしても折角來たものだ、外の女を呼んで一つ全盛に騒いで歸るとしやう」と之れから八郎兵衛は廣間へ來て「さアおまんを呼べ、おこんも

おはなも皆来て呉れ、酒や肴もごん／＼出して呉れ、一つ陽氣に騒いで歸るから」と大勢を呼んでごん／＼陽氣に騒いで居たもう、之れ切り來まいと思ふから金びらを切つての全盛遊び、先づ之れ迄は無事であつたが、恰度其八郎兵衛が騒いで居る所へ折も折、例の香具屋彌兵衛と忠藏の二人が何時の間にかヌツと這入つて來た。彌やア大變な全盛だな、富田屋の若旦那となると又別段だな、俺もまアおつまの所へは三日にあげずやつて來る、一日遇はねば千日もと云ふ仲だが、こんな全盛遊びはしたことはない、本當にどうも大層なものだ、之れでは俺は汝の親父に話をし何とかしなければならぬ、斯う云ふ全盛遊びをして居ると遂には富田屋の家は潰れるからな、言ふと八郎兵衛は憤として「ハ何とでも言いたければ言ふが可い、富田屋許りに日は照らない、何處へ行つても八郎兵衛は一本立の古着屋だ」彌「大き

なことを言ふな、やい八郎兵衛、汝はな、兩國橋で身を投げて死なうとしたのを鍾馗の三次に助けられた事を忘れやがつたか、一本立もないものだ、オイ忠藏、本當に人を馬鹿にして居るぢやねエか」傍らに居た忠藏は「さうとも一本立も二本立もあるものか、生意氣なことを言ふにも程がある、態ア見やがれ」ハ「ヤイ忠藏、貴様に於ては能くも此俺を踏付けにしやがつたな」忠「何だ、汝の様な者踏み付けたつて構うものか」ハ「ウーム、不忠不義の大悪黨……」忠「何だ」とハ「何も角もあるものか……」言合つて居る所へおつまがやつて來た「オヤ皆さん御揃ひですね」彌「オウおつまか、さア／＼此方へ御這入り」ハ「ア有難う、本當にこんなに皆さん揃つて居やうとは思はなかつた、オヤ／＼誰かと思つたら八さんも……」ハ「やいおつま、貴様は水野紋彌と云ふ人と大變に宜い仲だな」ハ「ア、さうです

よ、それが何したの、水野紋彌さんはね、あれは前から妾の御馴染、二世と換した可愛い人だよ、あの人の爲には子まで出来ただけれども別れなければならぬ時が来て涙乍らに別れたのだが、今日来て遇たのは本當に嬉しいよ、もう紋彌さんが来た以上は外の男は忌やになつた、八さん、お前さんなどはもう御客にはしないよ、彌兵衛さん「彌何だ」つ妾は本當に頼母しく思つて居る池田様の御家來の水野さんと云ふ御方が来て下さつたので嬉しいのよ「彌勝手にしやがれ」つそんなに怒らなくても可いやね八さん、もう此様な所へは来て御呉れでない、お前の面を見るのも忌やだから、不實男の面を見るのも忌やになつた、それに引き代へあの紋彌さんの様子の好き、追つ付け妾は御武家の御妾になるのだよ、それはさうと彌兵衛さん、お前さんは好い香を持つて居る、後生だから好い香を妾に御呉れ、紋彌さんに上げ

217 衛兵耶八妻お

るのだから「彌此所にある、之れを持つて行け」つさう、貰つて行きますよ、ドレ今夜は紋彌さんとしつぱり昔の夢でも見やうかね」と言ひつゝ、ズツと立つて行くのを見て八郎兵衛は「幾ら其水野紋彌と云ふ人が来たからと言つて、夫程までに言ふにも及ぶまい「夫では餘り酷過ぎると云ふものだ、自分から此八郎兵衛を一時は亭主にしやうとまで……」彌やいゝ八郎兵衛、貴様はさう云ふ馬鹿だから手が付けられない、本當に呆れた奴だ、此彌兵衛は五十兩の金を汝の爲に誤魔化されて取られた、それをおつまが汝の所へやつたと云ふに、汝は取りつ切りで夫れからと云ふものは顔も出さない禮にも來ないと云ふ不實な奴、本當に何と云ふ奴だらう、なア忠藏「忠」さうですとも、そればかりではなく主人の金を使ひ込んだ大泥棒、本來ならば縛り首にもなるべき奴だ、やい稻葉小僧、鼠小僧……」散々に恥かしめ

られて、八郎兵衛も今は堪え兼ねたか、烈火の如く憤り「やい何を言ふか」と立上つた「忠」何も角にもあるものか「八」エ、此畜生……」女共は驚いて「アレ御止しなさいよ、どうぞ静かに」と言つて之れを止めやうとする途端、忠藏に於いては井を取て八郎兵衛をボカリ擲つた、彌兵衛も此野郎と言ひながら拳を固めて八郎兵衛を擲つたから八郎兵衛も今は負けては居ない、何をする此畜生と、愈々喧嘩が始まつた、二三擲り合つて居る内に一方は二人一方は一人だ、殊に彌兵衛に忠藏の方が力もある忽ち八郎兵衛を引き据ゑてボカ／＼やつた、八郎兵衛は今は必死だ、そこにあつた井を投げる、徳利を投る、イヤもう大變な騒ぎ、それを聞付けて當家の主人重兵衛が「どうも皆さん冗談をしては困りますよ」と夫れへ飛んで来たのは宜つたが、右の騒ぎを見ると亂暴にも突然八郎兵衛を擲つた「八」やア汝まで俺を擲り

やがつたな「重」何を吐かしやがる、俺の家へ来てこんな騒ぎやがつて勘辨出来ねエ」と又も引つ捕へてボカ／＼擲り彌兵衛も忠藏も共に掛つてボカ／＼やつたから、八郎兵衛は今は絶體絶命、夢中になつてそこを飛出してバラ／＼廊下へ駈出した、おまんが「まア八さん御待ちなさいよ」と止めるも何も聞かばこそ「八」やいおつま、皆なにこんな目に遇たのも汝が悪いからだ……」と云ひつゝ、一室へ飛込とそこにおつまも居なければ紋彌も居りませぬ、片隅に紋彌の差料の一刀があつた、所へ「野郎擲つて仕舞へ、やア野郎こんな所に居やがつたが、太エ奴だ」と飛び込んて来て突如八郎兵衛をドーンと突いた、アツと言つて八郎兵衛それへ轉んだ途端、不圖それにあつた紋彌の一刀へ手が觸つたから堪らない、夢中になつて八郎兵衛、其刀をスラリと抜いてスボリ彌兵衛の頭へ斬り付けた「彌」ア痛い／＼やア斬やが

つたな……。「言はれて八郎兵衛ハツと気が付いた、ア、失策つたと思つたが、もう仕方がない。ハ「ウーム、此所にあつたは誰の刀か……。「彌「やい八郎兵衛、己奴は斬つたな……。「ハ「ウーム、もう斯うなるからは、エ、此畜生ツ」とスポリやる。と今度は彌兵衛の腕を斬た。彌「ア痛い……又斬りやがつた……。「所へ來掛る忠藏、之れを見ると悔くり仰天。忠「やア八郎兵衛、己奴はとんでもないことをしやがつたな……。「ハ「エ、何を」一つやると忠藏の顔へ斬付けた。忠「ア痛い……。「どうも九月と云ふ月は氣の暴くなる月だと云ふがさうかも知れない、彌兵衛は只もう驚いて「人殺しく」と吐鳴つた、するとハ「やい何を言ふ」スポリやると今度は彌兵衛の鼻を殺いた、彌兵衛はアツとそれへ倒れる折しも、それへ來たのが例のおつま「アラ八さん、お前さんはまアとんでもないことを……。「言はせも敢へず八郎

兵衛「エ、此阿魔、覺えて居ろツよくも俺を馬鹿にしやがつたな」スポリ肩先さへと斬付けた、血塗れになつたおつまは八郎兵衛へしがみ付いて「ま……待つて下さい八さん……。「ハ「何を言ひやがる、汝が出て來たばかりに言葉の上に花が咲き、彌兵衛と忠藏の爲に打たれ叩かれ、殺す心はなかつたが、つひ手に當つて此一刀で、怨み重なる二人を斬つた、此上は汝の命を貰はにやならぬ覺悟しろツ」つ「夫は命も上げ様が、まア〜待つて下さい、お前に愛想盡かしを言つたのは實に深い仔細のあると……。「ハ「何だと……。「八郎兵衛思はず一刀を後へ引いた、おつまは八郎兵衛に斬付られて、苦しみ息を吐きつ、つ「まア〜待つて下さい、おつまは水野紋彌さんに遇つて嬉しいことは嬉しいが、決してお前さんを棄てる氣はない八さん、妾はお前さんを思つて居るのだ」ハ「嘘を吐け」つ「嘘ではない、今も今とて

紋彌さんと此後のことに就て、相談をして居た所、それが済んで彼方の座敷此方の座敷と見せて廻つて居る途中、人殺しと云ふ聲を聞いて何事が始まつたのかと急いで来て見ればお前に斬付けられて此始末、八さん、實はお前さんと富田屋のおときさんと長く夫婦で添遂げさせたいと思ふ心は山々、妾の所へお前が来るやうでは夫れもならず、もう妾のことは思切りお前の心の固まるやうに思へばこそ、愛想盡しを言つたのを、思ひ違へてお前の腹立ち……」八「エ、夫では何か、汝は此八郎兵衛を心から棄る氣はなかつたのか、富田屋の養子で無事に世を送らせたいと云ふので愛想盡しと言つたのか、さうとは知らず八郎兵衛、彌兵衛と忠藏に恥かしめられ、ムラ／＼する所へ手に觸つた一刀が、人殺しの種となつたるか、ア、／＼之れも自分の愚か故、許して呉れよコレおつま」つもう斯うなつたら八さん寧ろ妾を殺

て……」八「ウム、汝ばかりは殺しはせぬ、俺も共に跡から行く、是非なきことだ、覺悟をしろッ」とおつまの咽喉を目掛けて只だ一突き、所へそれ殺しては大變だ、家の金箱、手は付けさせぬと飛ん下來たのが當家の女將、見るより八郎兵衛、エ、スポリ、肩先から乳の下掛けて斬付けたから堪らない、女將のおちよは其儘倒れて仕舞つた、八郎兵衛に於いてはもう之れ迄なりと一刀を取直し我れ我が咽喉をグサと突いた、此時水野紋彌は酔つぱらつて一つの座敷に打倒れて居りましたが、人殺しがある聞いて驚いて来て見れば右の有様、直に八郎兵衛の一刀を取つたが、もう八郎兵衛に於ては絆切れて居る、彌兵衛は鼻を切られたけれども命は取止めた、忠藏は命には別條はない、それと云ふので直に御上へ訴へる、検視が來ると云ふ騒ぎ、池田の家來水野紋彌は係り合になつてはならぬと云ふので、一時此所を引取

たが、事済んで後におつまの屍體は自分が引取ることになりました、富田屋の方では主人の作太郎の怒りは一方ならぬが、おとさが涙ながらに八郎兵衛の屍體を引取て葬りました、元より死んだもので何うにも仕方がありません、斯う云ふ椿事があつた爲めに金猫銀猫と云ふものは間もなく御取拂ひになつたと云ふは據所ない、之れからは本所の御旅辨天の社内へ斯う云ふ類の家が澤山出来て大變に一時繁昌しましたが、之は水野越前守様の御改革で全く潰されて仕舞つた、さて今迄伺ひましたのがおつま八郎兵衛の實説袖日記の御話でムいます

お妻八郎兵衛終

明治四十三年七月二十日印刷
 明治四十三年七月廿三日發行

(定價金四拾錢)



著者 松林伯知
 發行者 東京市京橋區 出雲町一番地 野村鈴助
 東京市日本橋區 樽正町一番地 服部國太郎
 東京市麴町區 有樂町二丁目一 中村政雄
 印刷所 右 同 所 報 文 社
 發行所 東京市京橋區 出雲町一番地 新橋堂書店
 東京市日本橋區 樽正町一番地 服部書店

發賣元

東京市京橋區 出雲町一番地

名著刊行會

(新橋堂方)

◎松林伯知講演 ▲長原止水先生裝幀

徳川榮華物語

前篇 松の巻 竹の巻 梅の巻

後篇 櫻の巻 藤の巻 菊の巻

續篇 椿の巻 楓の巻 桐の巻

最新美本
定價六圓五十錢
郵稅三圓五十錢
特價四圓五十錢

合本
全三冊

狩野謙吾先生著

版四 神經衰弱自療法

定價金六十錢
郵稅金六錢

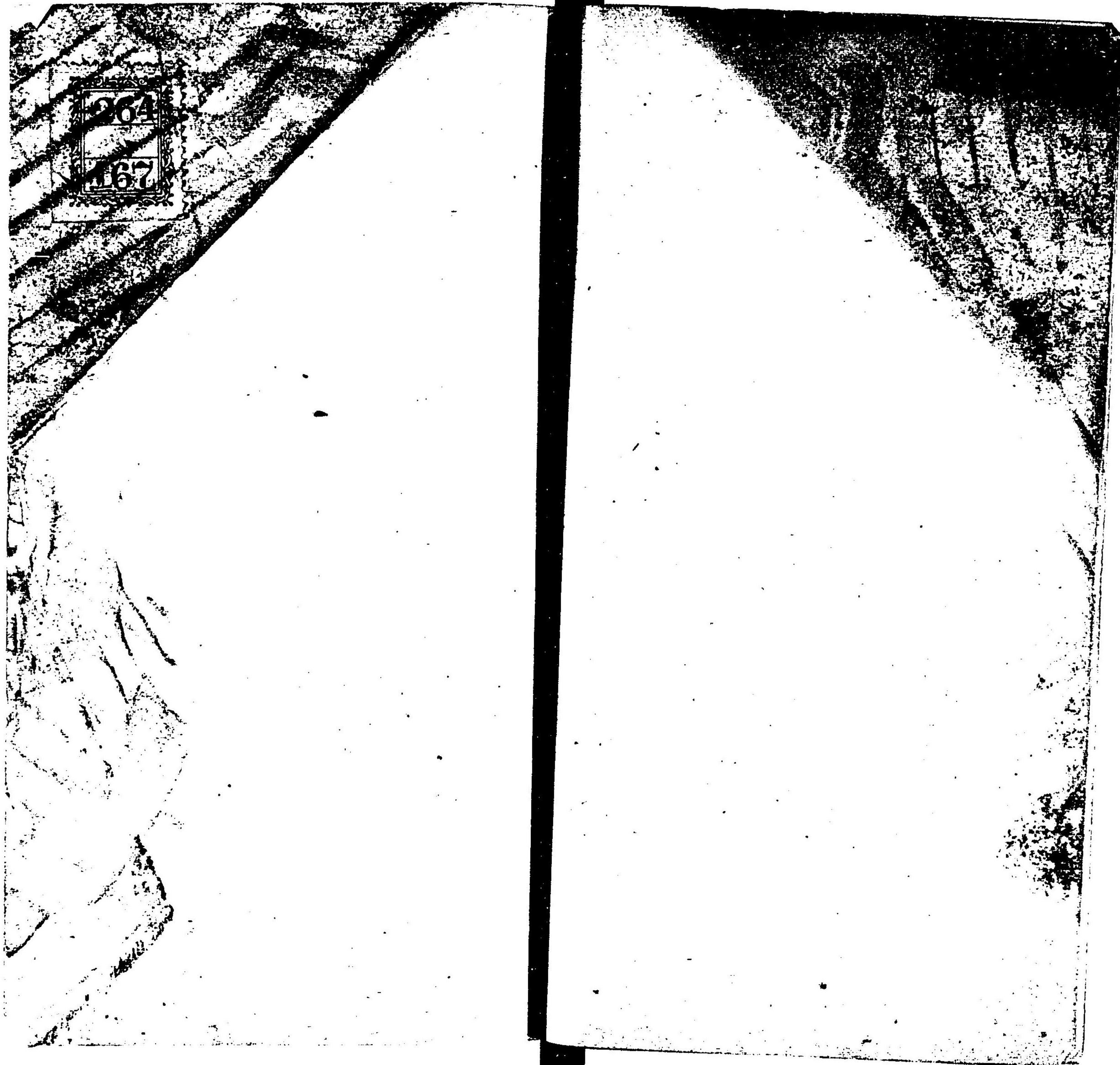
本書は神經衰弱症の專門醫として有名なる狩野病院院長が斯病救済の目的を以て各種神經衰弱の治療法を最も通俗的に詳細記述せられたる者にして中にも生殖器神經衰弱症の自療法は餘蘊なく之を説明せるを以て斯病に難める諸君は必ず一本を座右に供へて禍を未前に防ぐの智を學べ

東京銀座大通り新橋

新橋堂書店

電話新橋三六七〇
電話新橋三六七〇
電話新橋三六七〇

發賣元



264
167

